

研 究 紀 要

外 国 語 部 会

[講 演]「英語好きで英語力のある児童生徒を育てるための指導と評価

ー学習指導要領の趣旨を実現するための英語の授業づくり」

文教大学国際学部国際理解学科・大学院国際学研究科 教授 阿野 幸一 …… 1

[公開授業]

発表者 青森県立八戸西高等学校 教諭 馬場 豊樹 …… 2

[分科会]「音が育む英語学習の基礎・基本～生涯に渡って活かせる英語力の素地を養う～」

発表者 青森県立鰺ヶ沢高等学校 教諭 葛西 麗理 …… 4

部 会 の 動 き …………… 7

研 究 テ ー マ …………… 8

紀要編集委員 木村 紗耶香 （青森県立青森南高等学校）

外国語部会

講演

【英語好きで英語力のある児童生徒を育てるための指導と評価】

一学習指導要領の趣旨を実現するための英語の授業づくりー

文教大学国際学部国際理解学科・大学院国際学研究科 教授 阿野 幸一 氏
記録者 青森県立八戸高等学校 教諭 栗 橋 奈々子

我々が英語を教えている目的は「英語好きな子どもたちを育てるため」であるが、子どもたちの立場で考えると、「長いレールの上に小・中・高があり、どこかで脱線すると大変なことになる」とも言える。学習指導要領に基づき、「小・中・高で」「同じ方向を向いて」「バトンをつないでいるか」ということが、英語の授業づくりをするうえで非常に重要である。

事例 1 : What food do you like? という質問に対し、生徒の答案として以下の 2 つのどちらをより高い得点として評価するか。

① I like yakiniku.

② I like yakiniku and my sister like yakiniku, too.

①をより高評価する場合の着目点は「外国語の文構造（表現）の見方・考え方」で、②の場合は「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」と言える。学習指導要領を踏まえて、英語の指導に当たる教員が目指すべきなのは、②を高評価する視点である。

事例 2 : 複数形の指導。

題材は以下の小学校 6 年生のスピーチである。

China is a nice country. You can eat Chinese food. You can see many pandas. It is cute!

小学生にとっては「I like dogs/cats.」の流れが定着していると考えられるが、「They are cute!」に直さなくて良いのか、という疑問も生じる。その際の feedback には以下の 3 つを考えてみる。

① They are に訂正する。→ 明示的 feedback

② "Yes, pandas. They are cute!" (と教員が言う。) → 暗示的 feedback

③ Oh pandas! I want to see pandas. (と教員が言う。) → panda に焦点を当てる。

①は説明による指導で、学習済みの項目（テストの振り返りなど）で行うことが考えられる。

②のような feedback をする場合、この生徒が It と They の違いを知識として持っていることが大前提となる。

③は、子どもたちの伝えたい気持ちを受け止め、それを何よりも大切にし、次の流れにつなげることができると考えられる。

①②③のどれが良い・悪いということではなく、学習指導要領のキーワードである「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて」というポイントを改めて考えて、指導に当たると良い。

事例 3 : 小・中・高での文法学習を「Can you swim?」という文を通して考える。

小学校 めあての例としては「できることを伝えよう」「友だちができることを尋ねよう」等が考えられる。小学生は can を使えるようになっていってほしいと思って取り組んでいるわけではなく、「あの子、〇〇ができるんだって。すごいね!」「わたしも〇〇やってみたい!」など、友だちについての情報を得て、友だちのことを知る機会となっている。

中学校 どのような場面で「Can you swim?」という表現を使うのかを考える。Yes ならば、「Let's go to Shirahama Beach! We can swim there.」のように、話題が展開していく可能性を広げられる。

高校 「Can you swim?」という問いに対する泳げない生徒の答えは、中学生ならば「No, I can't. But I can ~.」のようなものが想定される。高校生であれば、中 3 で学習した「I wish I could.」のような表現がこの場面で出てくると

いうことが「英語を使える」ということなのではないか。つまり、このような場面でこのような表現がさっと出てくれば「小→中→高のバトンがつながっている」と言える。

英語教育を走ることに例えて、小・中・高のバトンをつなぐというスタンスで授業づくりをしていくことを目指したい。

【質疑応答】

青森県・弘前高等学校・舘田剛志

質問 1：言語の使用場面は、日本人同士とか、色々設定レベルが変わってくるが、どうすべきでしょうか。

回答 1：だからこそ場面設定が必要になります。特に高校は設定場面が広がってくるので、単元で変えてみるなどの工夫もできると思われます。

質問 2：新出単語の線引きの度合いについて御教示ください。

回答 2：高校は、本当に題材に合わせて（新出単語が）出てきています。題材に興味がある子は覚えればよいですし、興味がない子は気にしなくていいのではないのでしょうか。20語に1つ分からなくても、文の理解に影響はないというデータもあります。知りたい、という子はどんどん入れていけばよいと思います。

公 開 授 業

発表者	青森県立八戸西高等学校	教諭	馬 場 豊 樹
助言者	文教大学国際学部国際理解学科・大学院国際学研究科	教授	阿野 幸一 氏
司会者	青森県立八戸高等学校	教諭	武 川 真 樹
記録者	青森県立八戸北高等学校	教諭	川 原 裕

1 学校の紹介

青森県立八戸西高等学校は、1975年4月に開校した全日制高校です。「自啓自発」を校訓に、「生徒一人一人の興味・関心に応じた教育活動や自己の在り方・生き方を考察させるキャリア教育、豊かなスポーツライフを実現するための学びを通して、自らを高め続ける態度を養うとともに、部活動や社会奉仕活動を推進し、リーダー性や郷土を愛する心を育み、創造性豊かで社会の発展を担う人財を育成」をスクール・ミッションに掲げています。

各学年6クラス、普通科5クラスとスポーツ科学科1クラスの編成で、スポーツ科学科は、2001年4月に設置された学科です。現在696名が在籍しています。2年生より希望進路に応じて文系と理系に分かれ、大半の生徒が大学等への進学を目指しています。また、全国高校総体に出場した柔道部、テニス部や昨年度全国大会で敢闘賞を受賞した茶華道部など、部活動も大変盛んな学校です。

2 研究テーマ設定の理由

昨年8月、県高教研外国語部会研究大会分科会で生徒の発信力を高める取り組みとして発表する機会をいただきました。そこで、高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説外国語編の中で示されている高等学校の授業における課題（【中略】高等学校の授業においては、依然として外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動が適切に行われていないこと、「やり取り」や「即興性」を意識した言語活動が十分ではないこと、読んだことについて意見を述べ合うなど複数の領域を結びつけた言語活動が適切に行われていないことといった課題がある。）を知り、テーマの設定をしました。

3 研究の内容

（1）アウトプットへの流れ

4技能を駆使し、自分の考えていた範囲を超えた考えもあるという驚きがある活動をすることで生徒にとって深い学びになるような工夫をする。1つの技能の伸長を意識するのではなく、複数の領域を結びつけた言語活動

を行う。聞いたり、読んだりする活動を通して、生徒が余裕を持って考えることができる時間を確保し、自分の意見を話したり、書いたりできる場面を与えることができるようにする。

(2) 授業アンケート (Google Form) 実施結果

【 調査結果概要 】

＜令和5年4月に実施した授業アンケート結果＞

伸びたと実感する技能 / 伸ばしたい技能

- | | | | |
|----|---------------|---|---------------|
| 1位 | ライティング(38.0%) | / | ライティング(33.0%) |
| 2位 | リーディング(34.0%) | / | リスニング(28.6%) |
| 3位 | スピーキング(19.0%) | / | リーディング(25.3%) |
| 4位 | リスニング(9%) | / | スピーキング(13.1%) |

＜令和5年8月に実施した授業アンケート結果＞

伸びたと実感する技能 / 伸ばしたい技能

- | | | | |
|----|---------------|---|---------------|
| 1位 | ライティング(38.8%) | / | リスニング(31.3%) |
| 2位 | リーディング(31.3%) | / | リーディング(28.4%) |
| 3位 | スピーキング(23.9%) | / | ライティング(26.9%) |
| 4位 | リスニング(6.0%) | / | スピーキング(13.4%) |

(生徒コメント一部抜粋)

- ・授業を通して自分の考えを書く機会が多く回数を重ねるうちに書ける量が多くなっていったから。
- ・難しくても、わかる単語を使って書くようになったから。
- ・自分の言いたいことを少しでも表現できるようになったから。
- ・授業などでペアと英語でたくさん話したから。
- ・英語で話す授業が多いから。
- ・授業でコミュニケーションをとって、英語の会話に慣れたから。
- ・聞いた内容を少し理解できるようになったから。
- ・授業でトークをする機会が多く自然にコミュニケーション能力が上がったから。
- ・簡単な表現を使って書けるようになった気がした。
- ・文法や接続詞などの使い方が少しずつ分かるようになり、表現方法の幅が広がったように感じたから。
- ・授業を通して自分の考えを書く機会が多く回数を重ねるうちに書ける量が多くなっていったから。
- ・完璧までとは言えないけれど大体の文の意味がわかるようになってきたと感じたから。
- ・授業などでペアと英語でたくさん話したから。
- ・聞いた内容を少し理解できるようになったから。

4 公開授業について

編集動画放映で生徒-生徒を軸にした授業内の活動に注目していただきたいです。教師側から一方的に知識を与えるのではなく、生徒同士でやり取りをする中で情報を共有し、別な表現の仕方や考えを参考に、自分の考えや理由を創造する態度に結びつけて欲しいと願って授業づくりをしました。また、生徒が間違いを恐れることなく英語を使おうとする姿を通して、教師-生徒、生徒-生徒の発話しやすい雰囲気が存在していることにも気付いていただきたいと思います。当日の編集動画放映では、使う英語に間違いがあるかもしれませんが、教師も生徒たちも日頃の授業で英語を使おうとしている姿が伝わることを願っています。

(以上、大会プログラムの再掲)

5 公開授業を終えて

本日の授業では複数の領域を結びつけて、言語活動を通して他者と意見交換をし、最後に自分の意見をまとめる活動を行いました。意識した点は、生徒が考える時間を十分に確保することでした。書く活動についてです。**warm-up** ではペアで一人の生徒が単語を提示され、その語をもう一人の生徒に説明しましたが、説明される生徒の聞く際の集中力が高まるという助言から導入しています。どう説明すれば聞き手が理解してくれるか考えることで、表現力の育成にもつながっています。リスニング部分では、音声聞いて内容を共有するだけでは、英語が苦手な生徒に十分な支援ができていなかったと感じました。まず全体に発問して考えさせるべきだったと考え

ています。リーディングは約10分で行いました。ドローン賛否に関する4人の意見をまとめたハンドアウトを渡しました。ALTの意見以外は生成AIのChatGPTで作成しました。生徒が単語調べに時間を使うより内容理解に時間を使ってほしかったため、語数を約40語、語彙レベルをCEFR A1に設定しました。ライティングは60語程度、15分で理由を含めて書き、端末上のアプリClassi Noteで教師に送信するように指示しました。苦手な生徒でも書けるように、教師のモデルを先に示すべきだったと感じました。ただ、ライティング活動の前か中間か後のどこでモデルを提示するのが良いのか、支援の仕方今後も今後勉強していきたいです。最後に生徒のライティングを匿名モードで共有し、他者の意見についても理解を深めました。今後も4技能を統合した授業を展開し、授業アンケートを継続して生徒の成果と課題について考察していきたいです。

【質疑応答】

質問 本時の授業は、ドローンへの賛否について話し合うというこのレッスンの単元目標達成のための核となる活動を取ってパート4の前に行った意図を教えてください。また、パート4をどのような意図を持って指導しましたか。(岩手県 種市高校 花山先生)

回答 パート2でドローンの問題点、パート3でメリットを学んだので、時間を空けないうちに活動で自己表現力を高めさせたいと考えました。パート4では生徒のライティングをシェアし、フィードバックをしました。文法もしくは内容のどちらにフォーカスして指導すべきかについては、皆さんと情報交換できればと思います。

【助言】

全体を通して生徒が考える場面をしっかりと設定した授業でした。教科書の題材を使って考える授業であり、パート3でメリット・デメリットが出た段階で意見発表を行ったのは良いタイミングだと思います。ゆっくりとしたテンポで生徒がしっかり思考できていました。ChatGPTを活用した意見文も組み合わせながら、スローラーナーが自分で意見を作ることによって達成感を得ることができたと思いました。順番として、話したことを書いているのが重要な点だと思います。生徒の意見文のフィードバックは、1～2文生徒に下線を引かせてこちらで直したり、グローバルエラーにこちらから下線を引いて生徒に考えさせることも、よい方法なのではないかと考えました。

【分科会】

「音が育む英語学習の基礎・基本」

～生涯に渡って活かせる英語力の素地を養う～

発表者	青森県立鰺ヶ沢高等学校	教諭	葛西麗理
助言者	山形県教育局高校教育課	指導主事	福島薫氏
司会者	青森県立黒石高等学校	教頭	山内拓雄
記録者	五所川原商業高等学校	教諭	金澤光修

1 鰺ヶ沢町と鰺ヶ沢高校の紹介

鰺ヶ沢町は青森県の西部に位置し、日本海と白神山地が隣接する自然豊かな静かな町で、わさおやパウダースノーが有名である。

勤務校である鰺ヶ沢高校は、今年度80周年を迎え、かつては相撲の強豪校であったが、現在は全校生徒が31名という小規模校である。進路状況は、生徒の大部分が美容系の専門学校、看護・介護系の短大、県内就職となっている。生徒の学力について、入試での点数が県内でも低く、特に英語に関しては苦手意識があり、英語学習への拒否反応を示す生徒が多い。

2 研究テーマを設定した理由

英語学習においては4技能5領域をバランスよく学習することが基礎・基本の定着につながると考え、「音声」に注目した。「音声」は言語の伝達機能として大きな役割を果たすため、「音声」に慣れ親しむことが英語学習における大切な要素であると考えた。

「読む・聞く・話す・書く」という4技能すべてが音声と密接な関わりをもつと考え、たくさん英語の音声に触れさせる機会をもつことが、基礎・基本の習得につながると思い指導に活かすよう心がけている。

3 研究内容

最初に、音声に触れさせる機会を増やすため、Classroom English, Small Talk, Warm-up English に着眼点を置いた。教師の英語は生徒達にとって貴重な音声教材そして言語材料となるので、Input の機会をできるだけ多く与えたいと考えた。特に Classroom English は授業内で使用頻度が高く、教師、生徒共に英語をなるべく使おうと心がけている。最初は、理解度が低かったが徐々に英語を理解し行動できるようになったと実感している。活動の際に注意していることは、「音声を聞き流すのではなく、音声に意識を傾けさせる」ことである。

次に注目したのが、「教師主導の授業から生徒主体の活動」への転換である。その理由は、生徒主体の活動のほうが音声を主体とした授業展開の可能性が広がるのではないかと考えたからである。また、生徒の学びのプロセスを大切にすることで、より効果的に学習事項を習得できるようになると考えた。

4 鯉ヶ沢高校での授業例

最初に Oral Introduction でレッスンに対し生徒の興味・関心を促し、題材に取り組む動機を与えることを目的としている。Oral Introduction 終了後は内容について確認し合う活動を設けている。活動ではデジタル教材を使用している。活動を進めていく中で、画像よりも動画のほうに生徒が興味・関心を示すということに気づき、現在は必要に応じてインターネットから言語材料を探し活用している。

次に Listening / Word Hunt について、各パートの概要把握のために Listening を行っている。英語が少しでも分かるという状態にするため、Listening の前には新出単語の確認を必ず行っている。小学校・中学校での基礎・基本が定着していない生徒がほとんどなので、Listening のハードルを少しでも下げようと配慮している。というのも、英語が苦手な生徒は、意味と音が切り離されていて、何を言っているか分からないと感じているように思われるからである。Word Hunt にかけて、文字情報を増やしていき、文字と音、意味との結びつきを強固にしていくようにしている。Word Hunt はポイントを整理しながら内容理解へとつながるよう取り入れている。生徒が自ら考え、他者と考えたものを共有し、訂正することによって、教師から与えられるときよりも、音声を声に出したり聞いたりする機会が増える。

第3の Comprehension / Reading practice について、授業内では日本語訳を与えたり、文法説明は行っていないため、この活動を次の Let's Try を円滑に進めるねらいで行っている。生徒は、文字と音、その意味の結びつきを確認し、「聞く・話す」を反復することで表現や文法事項が自然に身に付いてきていると実感している。ワークシートの様式は、フレーズ毎にスラッシュを入れたものを使用し、既習事項や重要事項を空欄にしている。

最後に Let's Try について、これまでの学習内容が身に付いているか、また身に付いたものを活かすことができるか、生徒が既習事項を用いて自己表現できるかを試すことを活動の目的としている。必ず、教師間、または生徒間の Feed back を行うようにしている。Feed back は英語力向上につながり、自己表現する機会を多くもつことは有効であると考ええる。

5 研究の成果

反復練習により文法や語彙が定着したと実感している。音声を意識した学びのプロセスの中で獲得された語彙や文法は無意識に使うことができるようになり、説明を聞くのが苦手な生徒が多い集団では効果的であると感じており、生徒は反復練習で身に付いた土台を基に、新たな英文を作成することが可能になってきている。

また、Listening 力や Communication 力が向上してきたと実感している。音声に触れる機会を多くもつことにより、音と単語の結びつきの理解が促進され、Listening 力が向上した。それにより英語学習への苦手意識が緩和され学習への取り組み状況が改善され、英語でのやりとりにおいて意思疎通がスムーズに行えるようになった。実際に、英検での合格者は増加し、英検受験者数も増えた。

本校には ALT が常駐していないため、定期的に来校するときに Communication を図る機会をできる限り設けるようにしている。Interview 形式や、会話の聞き取りなどの活動を行っている。

ALT の話しを聞くときも、入学時よりも生徒の反応が良く、しっかり理解しながら話を聞いている様子が見える。3年間の英語学習を通じて、積極性、学ぼうとする意欲、基本的な学力が身に付いたと実感している。

6 これからの課題

教員間での共通理解と評価内容の均質化、そして適切かつ明確な指導と評価の2つが生徒の学習改善、英語力向上につながると考えている。今後も生徒の英語力育成に資する授業を展開していくように努める。

【質疑応答】

質問 勤務校と規模が小さく似ているが、定期考査での **Listening** の導入や基礎力診断テストの取り組みはどのように行っているのか（青森県 大間高校 高橋先生）

回答 鯉ヶ沢高校は本年度から英語教員が2名になった。英語指導への考え方はそれぞれあるので、お互い尊重しながら進めて行きたいと考えていて、私の考えを押し付けることができない。教員2名で3年間となると、1人で3年間育てるようなものである。本校は少ないクラスで1クラス2名、多くて8名だが、小さいながらも2展開している。そのような状況下では2年次になったときに、1年次に教えていなかった生徒に突然指導してしまうということもあり、2年次でもその生徒にとっては1年次と同じになってしまうので、教員間での評価、指導法に関する情報共有に関して、今年1年振り返ったときに、議論する場面が多かったというのが課題であると感じている。定期考査に関しても、各定期考査で **Listening** にかかるものを出题するのは大変だということもあり、期末考査のみ **Listening** を出题している。生徒の発表やプレゼンテーションなど、例えばオバマ大統領のスピーチなど、生徒に暗唱させ本人のように読ませる課題を出して、それを生徒が1番良くできたと思うものを提出させて評価するような、テスト以外の場面でパフォーマンス評価をするようにしている。その際、生徒の負担にならない程度に、しっかり伝えて実施している。基礎力診断テストに関しては、進路マップという試験があり、夏季休業明けと冬季休業明けに実施している。

【助言】

少人数で教諭2名での2展開というのは、手厚い指導が行われている。英語に苦手意識を持っている生徒が多いが、それでも諦めずに英語のシャワーを浴びせることが素晴らしいと思った。学習指導要領では、教室を実際のコミュニケーションの場にするということを明言している。たくさん英語を聞かせて、色々な場面で、色々な形で聞かせていくなかで、ALTや教師とのやりとりや、動画などから、生徒にわかったと感じさせることが大切だと思う。その経験から、生徒が英語をもう少しやってみようかな、少し好きになったと感じていることが素晴らしいと思った。さらに、自然と英語のコミュニケーション力がついてきたことも見事であると感じた。

実際の生徒を見たわけでもないし、指導の過程も見えていないが、生徒が「ああ！わかった」というところから、もう一歩先のアウトプットを今後どうするかが大切だと思う。たくさん聞かせて、分かったと感じさせたところから、話したいと感じさせた段階であり、次はアウトプットに焦点を当てていくのはどうか。評価内容の均質化をしてくることについて。共通理解をするのも難しいが、実際にやってきたことで英検の受験率や合格率が上がったことは指導のエビデンスである。「これをやってみたら生徒がこうようになった」というように自信を持って、大きな声をあげて、輪を広げていってほしい。同一教科の教員数が多くないので、同じ目線で同じ評価にすることも可能かと思う。葛西先生の活動が生徒の自信につながっていると思うのでこれからも続けてほしい。

部 会 の 動 き

令和5年

5月22日（月）第1回役員会（於 青森県立青森南高等学校 コミュニケーションルーム）

- 案件（1） 令和5年度外国語部会役員（案）について
- （2） 令和4年度事業報告及び令和5年度事業計画（案）について
- （3） 令和4年度決算報告及び令和5年度予算（案）について
- （4） 令和5年度青森県高等学校英語暗唱・弁論大会（案）について
- （5） 令和5年度青森県即興型英語ディベート交流会（案）について
- （6） ローテーションの確認
- （7） 令和5年度東北六県英語教育研究大会について
- （8） その他

7月22日（土）青森県即興型英語ディベート交流会（オンライン開催）

9月 7日（木）青森県高等学校英語暗唱・弁論大会（於 青森県総合学校教育センター）

暗唱の部（1校1名まで） 3名参加

創作の部（1校2名まで） 22名参加 ※上位2名が東北大会へ出場

※創作の部に参加する学校は暗唱の部に参加できないこととする。

11月 1日（火）第73回東北六県英語教育研究大会（於 八戸市公会堂・八戸市公民館・八戸市美術館）
大会テーマ：「グローバル社会を共に切り拓く人材を育成する英語教育の在り方」

11月 2日（水）第71回東北六県中学校英語暗唱・高等学校英語弁論大会（於 八戸市公民館）

東北各県から中学校の部6名、高校の部12名参加

本県から暗唱の部・中学生1名と創作の部・高校生2名が参加

第73回全国英語教育研究大会（愛媛大会）

大会テーマ「“愛顔（えがお）つながる英語教育の実現”～グローバルな視点を持ったアクティブ・ラーナーの育成～」

11月24日（金）講演・公開授業（松山市民会館）

11月25日（土）分科会（愛媛大学）

令和6年

2月 8日（木）第2回役員会（於 青森県立青森南高等学校予定）

- 案件（1） 令和5年度事業報告及び令和6年度事業計画（案）について
- （2） 令和5年度決算報告（中間）及び令和6年度予算（案）について
- （3） 第73回東北六県英語教育研究大会及び第71回東北六県中学校英語暗唱・高等学校英語弁論大会について（報告）
- （4） 今後の研究ローテーションについて
- （5） その他

2月11日（日）第16回全国高等学校英語スピーチコンテスト（国立オリンピック記念青少年総合センター）

研 究 テ ー マ

紀要 (集)	年度	研 究 テ ー マ	会 場	会員数	大 会 参加数	大会発 表者数
30	60	○これからの英語教育を考える ー生きた英語力を育てるにはどうしたらよいかー	八工大第二高校	431	471 中高含	7
31	61	○英語教育に求められているもの ーFocus on the learnerー	五所川原高校	418	256	3
32	62	○自ら学ぶ力を育てる英語教育を目指して	弘前南高校	421	296	3
33	63	○国際化時代における英語教育のあり方を求めて	三沢高校	420	289	5
34	(平) 元	○国際化時代に対応する英語教育を求めて	青森高校	424	315	5
35	2	○コミュニケーション能力を育てる英語教育	八戸西高校	428	262	6
36	3	○コミュニケーション能力を育てる英語教育	板柳高校	408	272	7
37	4	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	弘 前 中 央 高 校	408	400 中高含	11
38	5	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	三本木高校	395	249	12
39	6	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	青森南高校	408	279	11
40	7	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	八戸高校	426	274	9
41	8	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	鯉ヶ沢高校	430	231	7
42	9	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	弘前高校	435	260	12
43	10	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	青森文化会館	423	1464	18
44	11	○コミュニケーション能力を育成する英語教育	田名部高校	417	179	7
45	12	○実践的コミュニケーション能力を養う 青森県の英語教育のあり方	八戸南高校	417	215	8
46	13	○国際化の中における青森県の英語教育のあり方	鶴田高校	410	166	8
47	14	○新学習指導要領に対応する英語教育のあり方	黒石高校	406	200	3
48	15	○新学習指導要領に対応した 青森県英語教育の課題解決をめざして	青森東高校	405	182	3
49	16	○コミュニケーション能力の育成ための課題解決を模索して ーHow Can We Solve In Improving Communicative Competence?ー	八戸高校	367	269	3
50	17	○実践的コミュニケーション能力を育成する指導と評価	三沢商業高校	367	126	3
51	18	○実践的コミュニケーション能力を育成する指導と評価	木造高校	348	130	3
52	19	○実践的コミュニケーション能力を育成する指導と評価	弘前文化センター	328	122	3
53	20	○実践的コミュニケーション能力を育成する指導と評価	県総合社会教育センター	326	137	3
54	21	○実践的コミュニケーション能力を育成する指導と評価	県総合社会教育センター	331	119	4
55	22	○「発信力」を育成するための4技能を統合した英語教育を 目指して (第60回東北六県英語教育研究大会)	弘前文化センター	340	344 中高含	7
56	23	○コミュニケーション能力を育成する指導と評価	八戸工業大学	341	120	4
57	24	○コミュニケーション能力を育成する指導と評価	県総合社会教育センター	324	125	4
58	25	○コミュニケーション能力を育成する指導と評価	アピオあおもり	338	135	4
59	26	○今、高校英語教育に求められているものは何か？	三沢市国際交流教育センター	337	120	5
60	27	○今、高校英語教育に求められているものは何か？	きざん八戸	323	136	9
61	28	○グローバル社会に貢献できる人財を育成する英語教育	リンクステーション青森	333	333 中高含	11
62	29	○グローバル社会に貢献できる人財を育成する英語教育 ～今、高校英語教育に求められているものは何か～	松の館(つがる市)	317	124	5
63	30	○グローバル社会に貢献できる人財を育成する英語教育 ～今、高校英語教育に求められているものは何か～	弘前文化センター	303	142	6
64	(令) 元	○生涯にわたって国際社会で生きていくための英語教育 ～協働的な学びを通して～	三沢市公会堂	309	127	14
65	3	○生涯にわたって国際社会で生きていくための英語教育 ～協働的な学びを通して～	オンライン	292	70	5
66	4	○生涯にわたって国際社会で生きていくための英語教育 ～協働的な学びを通して～	県総合社会教育センター	285	109	8
67	5	○グローバル社会を共に切り拓く人材を育成する英語教育の 在り方	八戸市公会堂	263	249 小中高含	29